

草原懇話会概要

草原懇話会の趣旨

阿蘇の草原は、平安時代から続くといわれる畜産のための放牧、採草、野焼きなど人間の関与によって維持されてきた。

昭和9年に阿蘇が日本で最初の国立公園に指定されたのも、世界最大のカルデラ地形とともにこの草原景観が評価されたものである。現在、年間1千万人を超える観光客が訪れるほか、火入れという人為によって維持されてきたヒゴタイ等大陸系遺存植物の存在など、生物多様性保全の面からも価値が高い。

しかしながら産業環境や地域社会の変化によって、畜産放牧のみによる草原の維持管理は実態上困難になりつつあり、行政による助成措置などへの要請が高まる一方、この際人為的な干渉をやめて自然の遷移にまかせるべきとの意見もある。

「草原懇話会」は、国立公園内の優れた景観を維持していくための長期的方向について、幅広い観点から検討を進めるため環境庁が設置したものであり、草原の実態について明らかにするとともに、維持についての様々な論点を整理し、草原景観の価値について議論を深めようとするものである。

第1回「草原懇話会」は、昨年10月29日に国立阿蘇青年の家において、公開型で開催した。

第2回は、今年3月17日に阿蘇町赤水原野において地元の原野管理組合の協力の下、懇委員はじめ地元関係者やこの問題に関心を持つ一般の方が野焼きを体験し、続いて「百姓村」を会場として交流会を行った。

第3回は、第1回での草原の現状及び論点、第2回での懇話会委員などによる野焼き体験などを踏まえて、草原の様々な価値や維持管理について議論を行った。

懇話会委員

北野 大(淑徳大学国際コミュニケーション学部教授)

永畑 道子(熊本近代文学館館長)

中谷健太郎(大分県易布院町の地域づくりリーダー)

佐藤 誠(熊本大学教育学部教授)

加藤辰巳(新潟大学理学部教授)

大滝 典雄

岩本 健太郎

中原 広(阿蘇地区パークボランティアの会会長)

後藤 恵善(九州農政局次長)

桐原 夏雄(白水村村長)

井 信行(前産山村上田尻牧野組合長)

第1回草原懇話会 概要

日 時 : 平成8年10月29日(火) 13:00~16:00

会 場 : 「国立阿蘇青年の家」講堂(一の宮町)

主な内容 : 1. 阿蘇の草原の実態等についての説明(小野寺所長)
併せてスライド上映

2. 阿蘇の草原保全に関する討論(司会:若井(財)阿蘇環境デザインセンター事務局長)

発 言 者 : (懇話会委員)

北野大、佐藤 成、加藤辰巳、岩本健太郎、中原 広、中谷健太郎、大滝典雄
井信行、山室頼雄(桐原夏雄委員代理)

(ゲストコメンテーター)

下河辺 淳 国土審議会会長

河崎 敦夫 阿蘇細町町長

吉田 興一 一の宮町長

瀬井 純雄 産山中学校教諭

(敬称略)

参 加 者 : 合計300名

(内役)

国関係者 10名

県・町村関係者 52名

牧野組合関係者 58名

一般参加者 180名

第1回草原懇話会 議事録：

*司会：若井 康彦（財）阿蘇環境デザインセンター事務局長

若井：

世界中を回っていらっしゃる北野さんから阿蘇の印象をお聞かせください。

北野 大委員：

私は東京生まれの東京育ちで、初めて阿蘇を訪れたのは大学1年生の夏休みで、昭和38年夏。

外輪山の火口原の中に鉄道が走り、人が住んでいるのを見たとき本当に驚いた。すごい山だと思った。住んでいる人はこわくないのかと思った。とにかく最初の印象はでかい、ものすごい山だということ。エベレストを超える山でしょう、私の知っている限りではこんなでかい山はふも外輪山は比較的高さが揃っており、それがちょうどお盆のふちのようで、阿蘇山はものすごく大きな規模のお盆のような山だと思う。

その後何回か訪れており、南阿蘇から根子岳を見たり、草千里も見た。

阿蘇は日本の、世界に誇る遺産という気がする。

若井：

そこに住んで暮らしている、そして草原を維持している主体である牧野組合の井さんから草原の実態や阿蘇の人々の暮らし、生業等について話を伺いたい。

井 信行委員：

私は産山村の上田尻という北外輪山の集落に住み、草地を生かした肉用牛の繁殖から肥育までの一貫経営で約90頭飼育している。

自分の住んでいる集落には60戸あり、肉用牛の飼育、施設園芸、稲作の他、九州でも有名な民宿がある。集落近くにある池山水源（名水）という観光名所を生かして、観光と農業を結びつけた農家経営がなされており、比較的人口減少の少ない集落である。

昭和51年から阿蘇の高原開発事業を始め、肉用牛の生産に取り組み、九州農業試験場等の力を借りて、改良草地づくり、肉用牛生産基地として昭和63年まで300位の頭、消費者と直結した販売も行ってきたが、一番大きな問題は、輸入自由化による価低迷で、そのため飼育頭数は事業を始めた時点よりは増えているが、ここところ少し減少している。

野焼きが困難になっている問題点として、価格低迷による非家畜農家の増加。過疎化と高齢化。野焼きだけでなく、原野と共に存続してきた集落のいろいろな行事等も含め、集落としての機能が麻痺化しつつある状況にある。就農構造の変化による兼業農家の増加。特に注目すべきことは山村集落では教育によって若い人が町へ出て、例えば町から通勤農業という新しいシステムが生まれている点が挙げられる。

農家の立場からこのような問題の解決策として次のようなことを提案したい。畜産農家、牧野組合の目的集団としての再編成。無家畜農家や非農家の増加と有畜農家の減少で管理が困難になってきていることが大きな問題である。肉用牛生産を農家経営の一部門としてやっていける集団をつくる。周年放牧による低コスト肉用牛生産の推進でこれは阿蘇が一番やらなければならないことだ。行政や国などいろんな方面から草原を考えること

は大切だと思っている。阿蘇は日本の中で北海道や沖縄と並ぶ三大肉用牛生産の基地であるが、以前1万8千頭いた牛も1万頭強まで減っている。このような現状を考えると人的確保だけでは、おそらく阿蘇の原野は守れない、阿蘇の草原は肉用牛でないと守れないと思う。新技術の普及推進、例えば、受精卵移植、双子生産など新技術を取り入れた肉用牛生産や衛生管理技術の開発を進め農家がもうかる肉用牛生産を進めていく必要がある。入会権の調整。阿蘇で多頭飼育をやっていきいたい人や今年畜産協が試験的にやっている平場の肉用牛を草地でのびのびと健康に育てていくシステムも入会権の調整がスムーズにいかないと進まないと思っている。賃貸供用ができ、入会権の調整がうまくいけばいいと思っている。

若井：

次にこの問題に行政の立場から取り組んでいっしやる方に話をうかがいたい。まず、白水村の草原に対する取り組みをお聞かせいただきたい。

山室白水村助役（桐原夏雄委員代理）：

白水村は阿蘇山の南に位置し、牧野は阿蘇山山腹の急傾斜地にある。野焼き面積は推定760haである。

阿蘇の大自然は、古くから農林業によって守られ千年の歴史があるとも言われている。農家は田畑を耕すために赤牛を飼い、使役牛として利用してきた。赤牛の飼育は阿蘇山腹の原野に生育する野草を飼料として放牧採草を行い、家畜として飼育されてきた。飼育の方法は夏山冬里である。子牛は農家の貴重な収入源であった。副産物として得られる赤牛の糞尿は、肥料として施され、穀物の増産に役立てられてきた。

近年、機械化の進展に伴い家畜にたよる農作業がなくなり赤牛は肉用牛に変わったが、農産物の国際化が進み、畜産価格の低迷による畜産農家の減少と農産物の自由化によって後継者が少なくなり、また高齢化が進み、畜産農家の減少を招いた。これまで牧野管理は畜産を通して切っても切れない関係にあったが、このような経過で衰退の一途をたどってきた。

この間行政として畜産の維持と増産に多額の財源を投じ、懸命に尽くしてきたが、畜産の国際化、自由化の波には勝てない状況にある。野焼きは畜産が衰退する過程においても農家はこれまで農家経済を維持し助けてくれた牧野を大切にするために数年間は野焼きを行い、粘り強く牧野の手入れを行ってきたが、畜産農家の減少と高齢化のため人手の確保が難しくなり、平成6年には野焼きが中止となった。しかし野焼きの未実施は枯れ草が堆積し、地盤が軟弱になり、雨季には崩壊による災害発生の恐れ、乾季には火災の発生の恐れが考えられた。また、動植物の生態系の変化、美環境の悪化が大きな社会問題となり、農家がこれまで実施してきた野焼きがどれだけ重要な役目を果たしてきたかが問われてきた。

行政としては野焼きの再開のために対策会議を重ね、災害防止、原野の保全、害虫駆除等の目的で助成対策を行い、平成7年度に野焼きを再開した。

平成7年度の野焼きにかかった経費を説明すると、火入れ共済保険27万3千円、防火帯設置費用160万円（機械借上げ料）、原野保全負担金444万円（野焼き作業への助成）の合計631万5千937円助成した。

平成8年度も継続の予定で557万3千円を計上し、村としては財政難を乗り越えて、自然環境保全のために実施しているがこの先何年続けられるか分からない。国立公園の景観維持、あるいは原野の保全のために今後高額を負担を強いられることは困難な状況である。畜産振興が課題であるが、野焼きの問題のために国や県も立ち上がり、自然環境の保全に取り組んでいただきたい。

若井：

次に一の宮町の取り組みをお聞かせいただきたい。

吉田 興 - 一の宮町長：

一の宮町でも野焼きに対する助成は行っている。平成4年に高岳と板子岳の峠の間にある牧野組合から人材の確保ができず危なくて野焼きができない、1年間野焼きを中止するという話が出てきた。役場ではいろいろ考え、これからもそういう事例が出てくると大変だと言うことで、阿蘇郡では初めてだったと思うが、平成5年度に各牧野組合（全部で24組合）に10万円強（合計約260万円）の助成を行い、それ以降毎年約300万円の助成を行っている。その後、全牧野組合が野焼きを実施している。しかし、これは呼び水として行っている事業で、将来はぜひ国や県、広くは阿蘇を愛する人たちの支援を願っている。以前、県に野焼きへの助成をお願いしたことがある。井さんや山室さんが言われたように、今後農家の高齢化により担い手が少なくなると野焼きが実施できなくなるのは明白な事実であり、阿蘇の草原を守るためにぜひ支援をお願いしたい。

若井：

先ほどの小野寺所長の説明の中に、実際の草原の面積がどのくらいあるのか、あるいはこの10年、20年間にどのように推移してきたのか、定説がないという話があったが、このあたりについて一番詳しい大滝さんにお話いただきたい。

大滝 典雄委員：

テーマが与えられたが、現役を退いてかなりになるので的確な数字を持っていないということもありとまどっている。このテーマの前にぜひ話したいことがある。私はこれまで26年間、自主的に阿蘇の草原や野焼きの調査研究を行ってきた。先ほど小野寺所長さんから草原問題には見えない部分がとても多いという発言があったが、その中で一番見えなかったのが野焼き面積である。ものの本によると一番多いのが3万haで少ないので2万haだが、どれも実体のない数字である。この話を熊本大学の今江先生に話したところ、「阿蘇に住んでいるあなたがせなならんことですよ」と言われ調査を始めた。調査方法はメッシュ法といって1km方眼の、環境庁にある環境調査用の地図を8枚使った。当時の農業改良普及センターの那須係長と一緒にいった。平成5年が11,085ha、平成6年が10,830haで、その後県開発課が衛星写真を使って調査して出た数値の10,600haと、私たちが足と目で調査した面積との誤差が200haしかなく、私たちはやったぜと思った。それはどちらが正しいというのではなく、私たちの数字が許容誤差範囲内にあったということである。

この調査の過程で、牧野組合長や農家の人たちと話をする機会に恵まれ、いろいろな情報を得ることができた。そこで野焼きの問題点は輪地切りの労働負担にあることが分かつ

できた。学問的に見えなかったものが少しずつ分かり始めた。例えば平均野焼き面積は1組合当たり60haであり、組合員1人当たり1.5haということ、また輪地切りの延長は1組合員当たり100mという長さだということが分かってきた。この中で非常に危機感を感じたのは野焼き作業従事者は入会権者だったり、有畜農家だけだったりと稼働員の分化がみられることだ。労働負担の算出に当たって割り算をどうするかで負担が倍になってくる。資料26ページの野焼きに関するアンケート結果は有効で参考になるものである。(すぐ出来ない12%、もうすぐできなくなる22%、まだやっで行ける76%)となっているが、まだやっで行けるといふ牧野組合は、これ以上増えることは絶対にないと断言できるほど維持が困難になっている。その原因は組合員の高齢化や過疎化である。野焼き維持に関して危機感が観念的に言われてきたが、私の今後の研究の課題は野焼き作業の「荷の重さ」、「事柄の苦しさ」をデジタル化することと考え、調査を行っている。一つの事例として、一の宮町の牧野組合を対象とした、負担の大きさのデジタル化を試みている。部内の161牧野組合の診断カルテを作成することによって、適正な助成措置ができ、どこが一番苦しい牧野組合かが分かる。診断カルテには具体的には5つの項目を設定した。1人当たりの輪地切りの面積、出役者の平均年齢、1当たりの野焼き面積、1人当たりの防火線の延長、1人当たりの林地との境界である。

現在、野焼き中止後の植生の変化がどうなるかを泉牧野組合と日の尾牧野組合を対象に追跡調査中である。5年間中止すると、まるっきり変わった草原になる。それはススキの極生相、巨大化した草丈2m40cmのススキになる。枯れ草の量は1.9t/10aとなり、これはいったん観光客の火が入ると大火災になる状況だ。地元の農家の言葉を借りれば、いったん火が起こると、阿蘇郡中の消防車が来ても火を消しきらんだろうというほどで、調査中も絶対タバコを吸ってくれると言われた。5年中止すると森林化の第一歩の兆しが見えてくる。それはヤマハギの巨大化で、野焼きをしていた時には雑鎌で簡単に切れていたヤマハギの根っこの回りが3~4cm、草丈4mになってまるっきり違うハギになっている。このような調査を今後も続け、情報発信をしていきたい。

先ほど井さんの話の中に阿蘇の草原は肉用牛がいないと絶対に守れない、日本における肉用牛生産基地としての維持存続の必要性が話されたが、分かりやすく、放牧中の牛に名刺の肩書きを与えるとすれば、私は「草原景観保全専従造園士」の名前を贈りたい。牛は4月上旬から11月下旬まで240日間で成牛1頭当たり1~2haの草を「下刈りして」くれる。牛は傾斜35°の草原まで守ってくれる。燃料は草であり、糞尿によって施肥も行ってくれる。一方、トラクターは価格は300万から600万円もするし、燃料や自賠責保険、免許等が必要である。傾斜分級調査によれば、トラクターの使える傾斜15°以内の土地は全章地面積の30%に過ぎず、それ以外は牛しか行けない所である。阿蘇の草原の有効な国土利用を考える場合絶対牛がいないとできない。その意味で別に「国土保全技能士」という肩書きがふさわしい。現在1万1千頭いる繁殖牛が5千頭以下になると、今はきれいな草千里がぼうぼうたる草原に変わる。阿蘇に行ったけれど他の山と何も変わらないという事態になった時に観光関連業者の方は危機感を持ってくると思う。そして牛がいかに大事であったかがわかると思う。

最後のまとめとして、放牧牛（草原景観保全専従造園士）に国民の理解のもと、草原景観保全奨励金を与えてはどうか。昭和40年から平成元年の間、年間120日放牧している牛一頭に対して7千円の助成金が出たが、今後は年間240日放牧されている牛に対し、草原景観と国土保全、肉用牛生産基地を守っているということで5万円前後の助成金を国家体制のもとに、システム化することをお願いしたい。今はこれを緊急的に行う時期に来ているといえる。

若井：

今までのお話から阿蘇の自然が人工的、大滝先生の言葉を借りれば牛工的な場所であることがわかってきたと思う。そうは言っても多様な要素で構成されている阿蘇だと思うので、この辺で阿蘇の自然環境の側面からご意見をいただきたいと思う。地元で阿蘇の植物と自然を研究している瀬井先生にお話したい。

瀬井 純雄産山中学校教諭：

県の希少野生動植物検討委員とハナシノブ保護増殖検討委員を務めている。1988年から5年かけて阿蘇の植物調査を行った。調査の結果分かったことは草原の植物が希少化していることだ。それも原因は草原の減少によって引き起こされている、私はそういう認識でいる。特に阿蘇の植物の場合、資料6ページにあるように、自然保護協会と野生生物基金日本委員会のまとめた日本版のレッドデータブックには絶滅危惧種として6種類載っている。県の保護対象種として7種類が挙げられており、その後昨年2種類ほど追加指定された。このように非常に危機的な状況にあるといえる。中でもいわゆる採草地、長茅型の草地と呼ばれる干し草刈や、野焼きが行われる場所に生息していた植物が、高齢化、過疎化によって野焼きや採草ができなくなり、非常に危機的な状況にある。これらの植物は阿蘇を代表する植物であり、全国で阿蘇だけにしか生育しない植物があり、これらは阿蘇で守らなければ日本から失われてしまう。ハナシノブに至っては日本にしかないので地球から絶滅してしまう。いろいろ議論されているが、植物の立場から言えば草原そのものを守ることが、これらの植物を守っていくことであり、植え戻しという方法では根本的な解決にはならず、希少植物は守れない。草原という環境、植物が生育する環境を守ることが植物を守ることにつながると考えている。

若井：

加藤さんには阿蘇の自然生態の位置づけについてご発言いただきたい。

加藤 辰巳委員：

初めて阿蘇を訪れたのは、20年近く前で、植物屋なので下ばかり向いて歩いていたが、阿蘇にはなんと妙な植物が多いことかと、妙なというのは見たことがないということだが、図鑑でしか見たことのない植物、中には図鑑にすら載っていない植物がたくさんあって面白いところだと思った。これらは阿蘇久住にしかない、あるいはあと数カ所にしかない変わった植物、貴重な植物だが、こういった植物がどこから来たのかを少し考えてみたい。小野寺所長の話にもあったように、現在の阿蘇の気候条件下では放置しておく草原は森林になる。日本がかつて大陸や樺太とつながっていた氷河期には阿蘇だけでなく、日本列島全体がもう少し寒冷で、もちろん森もあるけれど、あちこちに草原が点在していたと考えられている。その時、気候風土の似た大陸（満州、朝鮮）から、海峡を渡って植物が侵入

してきた。あるものは樺太経由で入ってきたかもしれない。秋の七草として知られるナデシコ、キキョウなども、おそらくその時代に渡ってきたと思われる。そのような日本全体に見られるものに加えて、阿蘇の場合は朝鮮に近いということもあり、文字どおり満州や朝鮮を特徴づけているような植物が寒い時期に日本に入ってきた。

その後温暖化により、日本列島では次第に森林化が進み、氷河期に日本に入ってきた生き物も消えていった。ナチュラルプロセスとして消えていった。例外的に岩木山や阿蘇など火山の周辺に草原型の植物が生き残った。それは度重なる噴火、降灰などにより森林化が妨害されて草原植物が生き残った。その後そこに人が住み着き、噴火がなくても火山の噴火に代わるものとして人が火入れをすることによって草原型の植生が維持されてきた。つまりツクシマツモトやヒゴタイ、ハナシノブなどは文字どおり氷河期の生き残りである。日本列島の生物相、植物相がたどって来た進化の生き証人であるといってもいい。もう一つは、単に一つ一つの植物だけでなく、阿蘇の場合は様々な植物全体としての生態系として古い時代のものがずっと生き残ってきたということがいえる。

日本列島にはすぐれた自然を残している場所がたくさんあるが、その多くは原生的な自然の美しさである。屋久島であり、白神山地がそうである。阿蘇の場合はそれに加えて人為がゆるやかに加えられることにより維持されてきた、つまり自然そのものの美しさに、人がほどよく手を加えることにより、維持されてきた、言い換えると自然と人間がともに共生す為ことによって維持されてきた植物相であり、生態系として大きな価値があると思う

阿蘇に来るようになって20年が経つが、私を驚かせてくれた美しい阿蘇の植物が次第次第に少なくなってきた。日本にはこのまま放置しておくとは絶滅の恐れのあるものが多いが、今その調査をしており、一部を紹介したい。生き物は、ある個体数を下回るともはや自力では種の維持が困難になってくる状況におかれる。危機的状況になるまで後何年あるのかデータやいろいろな工夫で算出することができるが、例えばヒゴタイはこれまでのような様子で阿蘇の草原をつぶし続けると危機的な状況になるのに後58年くらいしかない。同様にヤツシロソウは46年、ツクシマツモト31年、ハナシノブ18年、ハナカズラ6年という結果が出た。あくまで推定であるが、このような危機的な状況にある。一つ一つの植物だけでなく阿蘇の草原全体が非常に貴重なものであることは先ほど申しあげたが、全体が貴重であるにも関わらずその構成メンバーの一つ一つの植物がこれから数十年の間に櫛の歯が抜けるようにどんどん消えていくのは憂慮すべき状態であり、生物学者としては大変な危機感をもっていることをお話ししておきたい。

若井：

よく自然と人間の共生という言葉があるが、阿蘇の草原がその典型であるということが分かった。

次に話の方向を変えてみたいが、熊本県としての阿蘇や阿蘇の草原はどんな位置づけになるのか、中原さんにお伺いしたい。

中原 広委員：

熊本県にとっての阿蘇、あるいは阿蘇の草原についてはいろんな捉えかたがある。畜産という観点からみれば日本有数の大畜産基地であり、観光という面で見れば阿蘇に毎年

1,300万人の観光客が来て、県全体の入込み観光客数4,300万人の1/3ないし1/4を占めている。また、平成3年の調査によると県内でもう一度行きたい観光地として草千里が一位となっている。観光の点からすると非常に貴重な地域であり、特に草原が貴重といえる。

県庁内で草原に関わるセクションとして当部のほか農政部、商工観光部、環境公害部があるが、企画開発部は阿蘇を一つの地域の資源と考え、地域の活性化にどう活かすかという観点から検討している。今日はそういうセクションを離れて、一地方公務員としてこの問題に関してどういう悩みを抱えているかということ報告して諸先生方の材料にしたい。

阿蘇の草原は長年にわたる人為的な営みと自然との共生により維持されてきた好例であるという話があり、私自身もそう思う。この維持について行政的に問題の所在を分析してみると、従来、畜産という観点で草原を利用し、畜産農家が牧野組合という形で野焼きをし、採草、放牧をする形で維持してきた。昔は野焼きの負担と牧野利用の受益が一致していた。しかしながら井さんの話にもあったように牛肉の輸入自由化やいろんな畜産を取り巻く環境の変化の中で、非常に極端な言い方をすると、畜産需要の面でのみ草原を維持していくのは困難な状況になってきている。現実的に申して、畜産農家にとって負担に見合うだけの受益が見込めない状況がしばしば見受けられるのではないかと。

一方で、受益と言う観点からみると、畜産農家以外にも草原景観を楽しむ人々がいて、それは観光客であり、観光業者になるだろう。もっと広くみれば、住民全般であり、県民、国民である。学術的観点からいえば、それは国民全体に帰属するものだと思う。行政官的な言い方をすれば、現状においては極端な言い方をすれば、負担と受益の関係に乖離経があるといえる。この点が今私が一番悩むと言うか、思いあぐねているところである。

その他この問題についてはいくつか考慮しなくてはいけない事情がある。一つは加藤先生がおっしゃった時間的要素がある。大滝会長や小野寺所長のお話にもあったように野焼き作業は熟練者でなければできないこと、簡単に外部に委託すればいいじゃないかという議論を許さないものであるということを留意する必要がある。地域の中で高齢化が進んできている、野焼きという重労働を担わなければならない中で高齢化が進んできている。技術の伝承という点でも高齢化ということは頭に入れておかなければならない。

草原保全の負担をどこに、手法はどのように行えば良いかという問題が一番典型的な問題ではないかと思う。正直なところ答えはなかなかストレートにはでてこない。というのは制度的には入会権者による保全というのが素直である。大滝さんの話にもあったように畜産を離れた、牛を使わない形で草原を維持することは考えにくい状況にある。それを地域が支援していく、例えば畜産牛肉の消費拡大という支援のあり方もある。しかしそういう間接的手法だけでうまくいくのかという点がある。それでは観光客が直接的な受益者であるならば、観光客に負担してもらおうという案は理屈としては考えられるが、具体的手法として提案がむずかしい。地元の町村では公費負担をされつつあるが、公費負担でむずかしいのは、地域を超えて、例えば県レベル、国レベルで公費負担(納税者負担)をするととなると、さまざまな問題が出てくる。なぜ負担するのか、対象をどう絞るのかを決めたり、納税者の理解を得るのが難しい。一方で、地域づくりの問題なのでボランティアの活動が基本で良いのではという意見もある。いろいろ思い悩んでいるのが今の私の立場である。

県の取り組みとして、畜産サイドではいろいろな動きがあるが、企画開発部としては、草原実態調査を阿蘇環境デザインセンターに委託して実施したり、県民にそれを啓発するようなパネル展示を行ってきた。当面の対応としては現在のスキームを尊重しつつ何らかの支援をしていかないと維持できないという認識に立って、「阿蘇地域野焼き支援協議会」が設立できないか熊本県阿蘇事務所が中心になって関係町村と協議しているところである。

そういう当面の対応とは別に、長期的にどのようなスキームで負担していくか、いろんな観点から議論し準備していくことが大事である。

若井：

草原をめぐる問題の構造を明解にご説明いただいたと思う。次にみなさんご存じの(財)阿蘇グリーンストックについて佐藤さんからご説明願いたい

佐藤 誠委員：

この問題は、地元農家、行政だけで解決出来ない。いわんや都市のボランティアでどうなる問題でもない。この10年間、阿蘇を水源とする18億トンもの地下水盆の水や観光でメリットがある市民や企業にもご参加頂き、次の世代に素晴らしい緑の財産を引き継ぐ運動をやってきた立場から、解決策を提言したい。

財団法人・阿蘇グリーンストックは農業を安定的に続けたいと望む農業者と下流の生活者との住民連携が基盤になっている。1万2千人の主婦が子供の飲む安全な水道水の前払いとして、月百円を3年間積み立てた5千万円と、阿蘇町および地元経済界の寄付で設立された。この住民・行政・企業の対等な関係での連携運動は、創造的な農業振興、その結果としての草原保全と畜産資源自体を活用してのツーリズム開発を目指している。

今後の展開について、以下のように考えている。まず、第1に、市民の食の需要を組織し、草で飼う当たり前の畜産を普及させる。現在展開している産直活動のスケールを九州から全国に拡大し、サシ志向でないヘルシー・ビーフをコストを下げうる規模で生産する。また、草地酪農で低脂肪ミルクを作り、現地消費したい。

第2に、北部・中部九州の水瓶である本地域の水源かん養機能をアピールし、福岡県も含めて、水の恩恵にあずかる市民・企業から水源基金を集めて、恒常的な草原・森林維持の費用をつくり、あわせて、それとマッチングする額の公的資金を引き出す。そろそろ、国立公園として景観上、死守すべき台地の草原と、谷筋を中心とする森林とのゾーニングと其々の管理・活用方法を打ち出し、行政・企業・住民の果たすべき役割も考えよう。第3に、この大自然・景観・文化それ自体をテーマとする、農業者・エンドユーザーと行政・企業とが連携するツーリズム開発で、草原を多角的に利活用することで、新たな管理・維持費用を産み出したい。欧米と同じく、日本でも新・田園主義の時代をむかえ、田園リゾートが旅先として、また、居住地として人気が出てきているので、農林地の維持と利用の21世紀型システムをこの魅力の空間で創造したい。今世紀中に、「無駄な」草地が国土にしめる割合は11%から1%に激減し、故郷の原風景が喪われたが、本地域に纏まって残った草原は日本が有する貴重な文化的・自然的世界遺産であるから。

具体的なイメージとしては、阿蘇くじゅう国立公園の草原に、町村境に幅10メートルほどの野焼きラインを、火山灰と砂を混ぜて草が生えない「馬の道」として数十～百キロにわたって敷設し、約十キロごとに、ホース・トレッキングの馬や馬車ヤクロスカントリーやサイクリングを楽しむ人々が集う「馬の駅」を設ける。十勝では7百キロの馬の道を整備し、田園リゾートづくりが進んでいる。阿蘇くじゅうでも、景観動物として馬や羊が牛とならぶ、ツーリズムのスターとして登場してほしい。

馬の駅には、地元製品の販売やレストラン、宿泊や駐車機能は当然として、白い木柵に囲まれて家畜との触合いも欲しい。農業の幅を、生産（1次）、加工（2次）、外食やレジャー（3次）の全てを統合するものへと広げたい。1プラス2プラス3で「6次産業」・畜産による価値創造において、楽しく草原を護りたいものだ。

この阿蘇には、よそ者では想像も出来ない宝物、ストックが眠っている。ライブストック（いのちの資産一家畜）が緑の資産を護ってきたから、主役は農業者であることを確認しながら、多様な主体の登場を促して、新たな地域連携産業である「ムラ業」を興せないか。戦前の複合的な「範囲（スコープ）の経済性」、戦後の「規模（スケール）の経済性」の時代を越えた「縁や連結（ネットワーク）の経済性」を追求したい。

英国の草原トラスト事業を調査して思うことだが、環境・地域振興をテーマとする「信託」とは、土地やお金というスターティックなものではなくて、住民・行政・企業の一人一人の相互信頼に立ってのダイナミックな協調行動それ自体であろう。異なる組織原理を越えてアクションを起こす、ヒューマンな信頼関係こそが「トラスト」の意義だろう。地域資源を活用する、パートナーシップにおける地域管理のアートとして草原トラスト事業を、この際立ち上げていきたいものだ。この草原懇話会で出会った、私たちひとりひとりが、魅力の草原を次の世代に引き継ぐ誇り高い事業おこしに出来ることの最善をつくそうと決意することがまず第1歩となる。第2歩は、実務がこなせる協調行動のコア機能を有する、事業推進機関の「草原ビューロー」（仮称）設立であろうか。

若井：

地域振興、分野の連結としてグリーンストックを推進していると思うが、行政として一翼を担っている阿蘇町長に今後の展開を聞かせていただきたい。

河崎 敦夫阿蘇町長：

阿蘇にはすばらしい景観を維持してきた5百年～千年の歴史がある。野焼きの難しさは林地への延焼を防ぐための輪地切りをする必要があることだ。野焼きが困難になっている原因は畜産の経営あるいは林業経営がペイしていないことにあり、草原も森林も荒れっぱなしになっている。特に7・13水害がひどかった。7・13水害では森林地帯が崩壊し、手入れが行き届かないことによって外輪山の土砂が崩れ、河川に流れて大災害となったが、林業や畜産の経営がペイすれば草原をどうするかというような問題は起きない。そして問題解決は町村だけではできない。阿蘇町の牧野面積は6300haで、防火帯面積490ha、防火帯の長さが92kmに及ぶ。試験的に1kmの防火帯グリーンベルトを造成しているが、傾斜の緩やかな場所で100万円以上の費用がかかった。険しいところでは200～300万円かかるかもしれない。92kmの防火帯をつくる

のには1億5千~2億円かかるので町ではとても負担できない。これほどの町村も同じだと思う。

将来的に畜産物価格や木材価格の上昇が見込まれないなら国民の財産として積極的にどのような形でがんばっていただけるか、町村の行政担当者の偽らざる気持ちである。グリーンストックで民間のご理解も得ているのでこれが小石を投げて輪が広がる構想もさることながら積極的に行政の転換、国の施策においてなんとか阿蘇の景観、それは地域住民だけの財産ではないので、国の責任と義務において協力をお願いしたい。

若井：

阿蘇の隣の久住でも同じような草原の問題を抱えている。湯布院は優れた観光リゾートゾーンを作っている。草原と観光について、牛食い絶叫大会などいろいろ試みておられる中谷さんからお話願います。

中谷 健太郎委員：

牛食い絶叫大会は今もやっている。かつてやっていたのはそのもとになった「牛一頭牧場運動」である。草原の牧野としての使われ方が落ち込んでいくので、売り払いたいという意向が強く出ていた。売り払いたい牧野組合の方たちと、売り払われると別荘地やゴルフ場ができて住環境が危なくなるという一般的な危機感とがせめぎあって争いになった。それで牧野が成り立つように無料の牛が全国から送り込まれたらどうなるんだろうという話になって、それが「牛一頭牧場」に発展した。その話は前にいろいろやっているの、興味のある方は後でお尋ねください。運動は17、8年続いて、いい牛のツル(遺伝子)が固まって湯布院牛の系統ができた。しかし、17、8年も経つとみんなくたびれて、年をとって、私たちもお世話できなくなってやめた。あの時、公が応援してくれるとよかったと、つくづく思う。畜産振興の正しい系統にのってないことをやって、おまけに食管法にも違反していた。公は、裏で御礼に米を送るのはけしからんぞといいながら、温かく見逃してくれただけだったので、みんな疲れてやめた。しかし牛は豊後湯布院牛としていいツルが残って、その後全国大会でも次々にいい賞をいただいている。

湯布院でも野焼きは行われており、私自身も体験していたので、大変な作業だということは実感している。類焼を防ぐためには機敏な行動が必要とされるが、この作業を担う若い人が少なくなっている。湯布院でも危機的な状況にあるといえる。阿蘇は驚くべき広さで、さっき竹田の知人に会ったので何事ってきいたら、隣だから来たという。なるほど地図で見ると隣なんです。広範囲の人たちが阿蘇の問題に関わっているなあという思いを深く。した。湯布院のような小さな町でもそうだが、大きな阿蘇は広範囲の人たちで支える仕組みを作らないことにはどうにもならない。全国の中山同地と都市とがお互いに支え合うシステムを作らないといけない状況になっているんじゃないだろうか。

支え合う、結び合うということを私たちは長い湯布院のまちづくりの中でキーワードにしてきた。「牛一頭牧場」から発した「この土地に外のカヤ思いや願いや場合によってはお金をどんどん入れていただきたい、その代わりにここでできるものは皆さん方に提供しようじゃ

ないか」という運動、は今、町民と役場、商工会、農協等を結ぶ「湯布院親類クラブ」というものに結実しようとしている。今年の2月19日に設立され、2年くらいは調査とテストに費やしたあと、3年目くらいに立ち上げたいと思っている。乱暴な言い方をすると、「牛一頭牧場」は牛だけで展開したが、それを全面展開したい。みそでも米でも何でもいい。そして、その方々を村に迎える。

それは実は20数年前にヨーロッパを回った時、サーバス・インターナショナルというシステムに出会ったことと関係する。それはチェコなどの東欧の動乱から逃れてくる難民を西欧の人達が受け入れるシステムで、私たちは難民救済システムのはしっこに紛れ込んで、暖い無料宿泊のサービスをいただいていた。地域外の人間が各家庭に直に入れるシステムで、受け入れを希望する家族のデータが医者のカルテみたいになっていて、それには家族の名前と、それぞれの家族が何を提供できるかが書かれている。例えばお父さんは歌が上手で歌って歓迎してくれるとか、酒の能書きをしゃべってくれる、娘は英語が話せる、お母さんは朝食のサービスができるなど。人によっては泊めるだけ、昼食だけなど、あるいは何も出さないけど地図の説明くらいはしますよ、とか自分のできることを全部届け出ている。

それによって家庭の中の一人一人が外部の人につながっているというのが非常に面白かった。「牛一頭牧場」のシステムと「サーバス・インターナショナル」のシステムを合わせて「湯布院親類クラブ」のシステムをなんとか手探りしてみたい。この計画は県にも持ち込んだのだが、聞いたことも見たこともない計画には支援のしようがないということで、聞いたことも見たこともある話に結びつけて今、一村一品運動の見直しということで向こう3年間、外国の事例を調査することになった。県と町と両方から支援をいただいている。

今年はイタリアのアグリツーリズムを見る旅をしてきた。大変面白い経験だったが時間がないので省略する。

ただ非常に広いトスカナの野原に、昔からの農家に加えてミラノなど近代化の進んだ土地を手放して、トスカナに移って、これから展開されるであろう世界的な新しい観光の動き、佐藤先生のおっしゃったようなグリーンツーリズムに備えようという農家資本がある。地元の人々が苦手とするレストラン部門や観光案内、歴史を説明したりするシステムは、よそから来た人がうまくやっていて、トスカナに根っから居ついている人は泊めるだけだみたいなのところに止まっている。面白かったのは湯布院界隈で最近どんどんなくなっている村内の「出事(でごと)」「(死に事だから、道普請だからみんな出てこい)」がトスカナには生きていたことだ。マフィアのルートで泊めてやるからというからマフィアはやばいなど思ったんだが、マフィアというのは私の娘という意味で、まあいいじゃないか、親類縁者でみんな、なんとかするよという意味だった。そういうのが壊れてしまった村では、アグリツーリズムも絵にかいた餅になってしまうのではないか。こういう暖かい人間関係が基盤となって、新しい産業基盤が起これるのではないか。古いものが消えていくのを若い者と一緒に喜んでいる風潮は困ったもんだ。

親類クラブをやっていくのに事務局がいるのだが、グリーンツーリズムをなると窓口が農政課に固定されてしまう。事務局が農政課になると、商工観光課も企画課も、この間

まで面倒をみてくれた人たちが知らん顔をしてしまう。農協も同じ。それで観光協会が事務局をかって出て、人件費も含めて事業費を使わせていただいている。これが面白い方法へ向かうのではないが、今いい匂いがしている。観光協会は人手が足りないので全国から事務局長を公募した。静岡県の職員で都市計画の専門家が、湯布院町に2年間出向して、町から観光協会へと又貸し出向で辞令が降りた。自治省も了解し、人件費も半分以上静岡県がもってくれている。湯布院で勉強するんだという理屈が通ったようだ。この人が仕事を役所から取ってくる。普通だったら町外のコンサルタントへお願いする仕組みを、地元でやるだけのこと、珍しいことではないのだが、実際には農協も観光協会もあまりやっておられない。人手も中途半端、事業費も中途半端という例が多いようだが、うちは事業費は切って、人件費につきこみ、その代わりに仕事は役所等から受託してくる。このような出向のあり方を認めていただくのに苦労が多い。また国の方でも積極的に認めていただきたい。

失敗したのは町長選挙の時に持ちだした「副業サービスクラブ」という組織です。「仕事一本で食えなければ第二の仕事を持とうよ」（農家でありながら他に何かやる、宿屋なんだけど他にも「何か」やる）という仕組みで、それをお世話する組織を創ろう、それを選挙の項目に挙げようといったら、「落ちるからやめろ」といわれた（笑）。それをしぶとくやりたいと思っている。そういう意味で、ここの阿蘇環境デザインセンターのような所が大分県にもできたらいいと思っている。環境デザインセンターだけでなく、情報サービスセンターのような性格をどうやってくっつけるかが今からのぼくらの模索である。

町の環境整備に対しても、発言してゆきたく、そのためにはお金も出さなくてはと、観光基盤整備事業協力基金を作っている。宿泊業者が宿泊施設をつくったら定率の基金を出す。そのお金と同額を町も用意してくれる。こちらが7、8年間で貯めたお金が2,500万円で、従って町にも2,500万円貯まっている。それを基に散策路、街路樹その他環境整備をしようとしている。もちろんこれは呼び水でこの10倍くらいのお金が動いてくれることを期待している。

食べ物も観光がひっぱると様なことがないので、町を挙げての「収穫祭」という方向へ行って、まともにとりつこうという努力を始めている。ここの牛ならここの牛の食べ方があるはずなのに、京都料理を追いかけて、口の中でとろけるような、ちんまりとした味を探すやり方から早く逃れたいというのがぼくらの考えだ。

最後に今やっている運動の宣伝だが、「おやまは晴天、日出台、源流まつり」を11月1日から17日までやる。偶然だが日米合同演習と同じ期間だ。これからは源流地帯を見つめてゆきたい。自衛隊や安保、A憲法といったややこしい話だけではなく、源流はみんなで守ろうよ、そのために何をしよう、というのりでいきたい。今準備で忙しくしているが、多くの人に参加してくれている。赤字を出したらどうするとタベももめたが、赤字は知らん顔してとにかくやる。映画祭、音楽祭で20年間鍛えられたので少々の赤字には驚かない。琉球舞踊の佐藤大童子さん、雑誌編集の森まゆみさんも。東京から奄美のサトウキビ伐採に参加されている立松和平さんが参加してくださる。「一緒にやろう」というのだ。

きちんとしたことをやるという体験を通して都会の人が村の人になる。そこで一緒にものをつくる場をつくらないとただの観光になって、なんだか私は苦労するがあなたはおい

まで面倒をみてくれた人たちが知らん顔をしてしまう。農協も同じ。それで観光協会が事務局をかって出て、人件費も含めて事業費を使わせていただいている。これが面白い方法へ向かうのではないが、今いい匂いがしている。観光協会は人手が足りないのので全国から事務局長を公募した。静岡県の職員で都市計画の専門家が、湯布院町に2年間出向して、町から観光協会へと又貸し出向で辞令が降りた。自治省も了解し、人件費も半分以上静岡県がもってくれている。湯布院で勉強するんだという理屈が通ったようだ。この人が仕事を役所から取ってくる。普通だったら町外のコンサルタントへお願いする仕組みを、地元でやるだけのことで、珍しいことではないのだが、実際には農協も観光協会もあまりやっておられない。人手も中途半端、事業費も中途半端という例が多いようだが、うちは事業費は切って、人件費につきこみ、その代わりに仕事は役所等から受託してくる。このような出向のあり方を認めていただくのに苦労が多い。また国の方でも積極的に認めていただきたい。

失敗したのは町長選挙の時に持ちだした「副業サービスクラブ」という組織です。「仕事一本で食えなければ第二の仕事を持とうよ」(農家でありながら他に何かやる、宿屋なんだけど他にも「何か」やる)という仕組みで、それをお世話する組織を創ろう、それを選挙の項目に挙げようといったら、「落ちるからやめろ」といわれた(笑)。それをしぶとくやりたいと思っている。そういう意味で、ここの阿蘇環境デザインセンターのような所が大分県にもできたらいいと思っている。環境デザインセンターだけでなく、情報サービスセンターのような性格をどうやってくっつけるかが今からのぼくらの模索である。町の環境整備に対しても、発言してゆきたく、そのためにはお金も出さなくてはと、観光基盤整備事業協力基金を作っている。宿泊業者が宿泊施設をつくったら定率の基金を出す。そのお金と同額を町も用意してくれる。こちらが7、8年間で貯めたお金が2,500万円で、従って町にも2,500万円貯まっている。それを基に散策路、街路樹その他環境整備をやるようとしている。もちろんこれは呼び水でこの10倍くらいのお金が動いてくれることを期待している。

食べ物も観光がひっぱると様なことがないので、町を挙げての「収穫祭」という方向へ持って行って、まともにとりつこうという努力を始めている。ここの牛ならここの牛の食べ方があるはずなのに、京都料理を追いかけて、口の中ですりつぶるような、ちんまりとした味を探すり方から早く逃れたいというのがぼくらの考えだ。最後に今やっている運動の宣伝だが、「おやまは晴天、日出台、源流まつり」を11月1日から17日までやる。偶然だが日米合同演習と同じ期間だ。これからは源流地帯を見つめてゆきたい。自衛隊や安保、憲法といったややこしい話だけではなく、源流はみんなで守ろうよ、そのために何をしよう、というのりでいきたい。今準備で忙しくしているが、多くの人に参加してくれている。赤字を出したらどうするとタベもめめたが、赤字は知らん顔してとにかくやる。映画祭、音楽祭で20年間鍛えられたので少々赤字には驚かない。

琉球舞踊の佐藤大恵子さん、雑誌編集の森まゆみさんも。東京から奄美のサトウキビ伐採に参加されている立松和平さんが参加してくださる。「一緒にやろう」というのだ。

きちんとしたことをやるという体験を通して都会の人が村の人になる。そこで一緒にものをつくる場をつくらないとただの観光になって、なんだか私は苦労するがあなたはおい

しいところを食べてくださいみたいな姿勢になる。だから来る人も土地柄に入れない。一緒にやる「場」をつくと、来た人も汗だくになって、それが結びあいになる。映画祭も音楽祭も赤字だらけでやっているが、来た人も赤字を背負ってくれる。ノーギャラで立ち上げてくれる。そういう場をこれまで仕掛けてなかったように思う。一緒につくりあげていく、汗を一緒にかく場をつくれなにか。

若井：

岩本さんに阿蘇のさまざまな動きに対する感想をお聞かせいただきたい。

岩本 健太郎委員：

農政局はこれまで昭和30年代後半から40年代、50年代にかけて、特に畜産の方では草地開発を基盤整備として行ってきた。それ以外にも畜産振興ということで、乳牛、肉用牛へいろいろな援助、技術開発その他の施策を行ってきた。当面の野焼きの継続対策としては、本当に当面の対策ということだろうが、8年度から例えば、新しい常緑のもので防火帯ができないかとか、機械化ができないかとか試みている。

ただ、基本的な課題は畜産の振興にあると考え、つまり畜産農家の方が繁栄する、そういう形の畜産をめざしてやっている。こうした中で井さんの話にもあった、周年放牧や低コスト畜産、技術開発、糞尿のリサイクル事業への助成も行っているし、消費者との産直事業の展開ができればと考えて助成を行っている。

その他、これは畜産だけに限ったことではないが、基本的には地域の過疎化の現状の中で地域の活性化が野焼きの問題も含めて一番大きな問題だろうということで、地域の活性化対策としてさまざまな施策を行っている。畜産物加工、地域食品など、これらは一口に言えばグリーンツーリズムという言葉の範疇に入るのだろうが、これらも国がやるというより、地域のみなさんがやることをどれだけお手伝いできるかという観点でさせていたでいる。

このようにいろいろやっているが、畜産の変化に伴って草原も変化してくる。草原は観光的価値もあることだし、防火的な面、国土保全面での問題も顕在化してきている。この点は農林水産省としても非常に大きな問題意識を持っている。牛肉の自由化、また、農産物の国際競争による価格の低下、こういうのが農家の収入なり経営に直接はね返るわけで、この競争の反面、農業なり畜産の持っていたいろいろな役割、私たちは農業の多面的役割と言っているが、これらが十分機能しなくなる、この問題が重要だという認識は十分持っている。ところが、国際的な議論の中でなるべくこういう農業の持っている役割と産業としての農業の競争力、位置づけを区別して考える必要があるというのが国際的な風潮で、その中でウルグアイラウンドや国際問題が推移している。

ちょっと分かりにくいかも知れないが、端的に言えば、農業と環境という関係が議論されているが、農産物が競争の結果、価格が下がり、農家の手取りが少なくなると、地域で農家の数が少なくなっていく。こういう時に農業があることによって保たれていた環境的メリットを、その農業がなくなっていくとき農業政策でどれほどカバーしなければならないのかという問題である。過疎化、高齢化も外国との間で議論があったところで、今後の農業基本法の見直しの議論の中で一つのテーマにもなっている。

一方、農業の多面的な役割として、畜産に関連して草原の問題が出てきているのを都市の住民はほとんど知らないのも問題である。要するに安い畜産物、安い米があればよいという消費者が多い。こういう消費者や他の産業界の人にこの問題をどれだけ理解してもらえるかが私どものこれからの農政を考える上で課題である。国民全体のコンセンサス、農業はいろいろな面で役立っているんだということを知っていただき、その上で、みなさんはどういう形でご協力していただけますか、あるいは農産物、畜産物の価格で負担していただけますか、あるいは別な援助ができますかという問題提起をすること、あるいは理解してもらうことが重要だと考えている。入会権については地域での権利の行使が、社会が変化する中でどう変わってきているのか、野焼きの問題を解決するにはどうしたらいいか、まず大滝先生の話にあったように実態と問題を整理するのが一番重要である。入会権者のうち畜産農家と出役に出る人が乖離しているとしたら、そこをどうするかは行政としては入りにくい部分である。以前からの草地改良事業を推進する中でもかなり苦労してきた問題である。

若井：

今日の懇話会は終わりではなく、これからも延々とやっていこうとしているが、これからどういう方向でやっていけばいいかについて北野さんのお考えをお伺いしたい。

北野 大委員：

小野寺さんからお手紙をいただくまで、阿蘇にこのような草原の問題があるとは全く知らなかった。どうするかは今日いろいろ意見が出たし、次回以降議論するのだろう。自分の専門は環境といっても有害物質の管理で、自然保護ではないのでどうしたらいいのかよくわからないが、話をうかがって草原を維持していくことは今の世代だけでなく、次の世代にとっても大切なことと認識している。

私は基本的に受益者の負担が出てくると思っているが、それが一つの集団、一つのグループだけでなく、利益を得る人すべてが何らかの負担をしていくべきだと思う。環境保全にはいろいろな手法があるが、基本的には受益者負担と思っている。私は阿蘇の草原はずばらしいと思うが、これが北海道の釧路の湿原へ行くと、湿原はいいものだと思うだろうし、そこでも保全してくれよ、税金払ってと言われ、屋久島へ行っても同じというように日本中が全て大事なものであるが、それをランキング化できるだろうか、どこの自然を保全すべきかは非常にむずかしい。生態的にどうちがうのか、今住んでいる人にどういう影響があるのか。大蔵省側の言い方をすれば非常にむずかしくなる。

繰り返すようだが、阿蘇の草原から利益を得ている人たち、牧畜業、観光、それぞれの方が応分の負担をしていくというルールをつくらないと、こういう問題はこれからどこでも出てくる。森林も林業の後継者がいなくなって荒廃してくる。だれが保全していくのか。この会では阿蘇の草原の問題を契機として一般的な共通のルールを議論できたらいいなあと思っている。

若井：

最後に小野寺所長から総括をお願いしたい。

小野寺所長：

総括はとてもできないが、私自身は今日の会に2つの目標を持っていた。一つは、広い主点から議論する場を設けることであり、二つ目は会議の出発を地元で苦労されている方々の意見に耳を傾けることから始める、それも委員だけでなくできるだけたくさんの人と一緒に聞きたいと思っていた。今日、それが果たされたと感じている。

資料の最後の2ページに文学作品にみる阿蘇の自然という項目がある。この作業では10t以上の作品が簡単に集まった。地域外の高名な文学者が阿蘇の自然をどう捉えるか、地域の意識とどうつながっているのかを含めて第2回以降の検討を進めていきたいと思う。これで締めにするには惜しい会合なので、会場にいらっしゃっている東京海上研究所の下河辺さんから感想とコメントをいただきたい。

下河辺 淳国土審議会会長：

話をするつもりで来たのではないが、この問題には関心があるので感じたことを少し話させていただきたい。

この懇話会が連続して開催されるという点はすばらしく、この懇話会から未来の阿蘇が見えてくる期待を強く持った。しかもパネラーの職業や年齢が様々で良いが、次回より女性にも加わってほしいと思う。多少酷なことをいうと話の8割が阿蘇はいかにだめかということを実証する話で、開いていてそれほどだめならやめとこうかと思った。次回は自慢話を期待したい。畜産農家の中で阿蘇の畜産全体を考えれば厳しいけれどおれの農家は大丈夫だという自慢が少し聞こえてこないだろうか。あるいは女性でここに住んでおられて自分はこういうすばらしい生活を送っているというような合唱が聞こえてくると急に阿蘇が明るく見えて、それじゃやろうかという感じがする。これは実は私にも責任があり、政府にいた時、地方自治体が自分の自治体はだめだというと国がお金を出すシステムをつくったのを今は間違いだったと反省している。首長さんは東京でいかに自分の町がだめかということを実説する能力で当選しているんじゃないか、と思うような国は長く続かないと思う。みんな自慢話から日本を考えることを2回目以降の懇話会に希望したい。

阿蘇の大自然を見ていると気持ちが大きくなり、違った角度から少し話をさせていただきたい。日本民族がこの島に住み始めて歴史が長くなった。最近縄文時代が関心を集めているが、縄文時代の日本の人口は60万人、7~8世紀は6百万人、戦国時代は1千万人、江戸時代は3千万人、明治時代は4千万人、戦後1億人を超え、21世紀の初頭に1億3千万人くらいになって人口の増加は止まると見られている。23世紀には7千万人を割ると思っている。縄文から22、3世紀に亘る歴史の流れを感じている。今ちょうどピークに来て、これから減少する時期に我々は立たされているわけである。

阿蘇は古代からいろんな農業や文化が生まれてきて、今日に至り、22、3世紀に歴史が流れていくわけである。今瞬間的に考えると野焼きも人がいなくてできないというけれど、野焼きの歴史がいつから始まったのか、その時の人口は何人だったのかということの方が私には気になっている。戦後役人になってここへ来たとき過剰人口を都会へひっぱっていく相談の会議が中心だった。いかに人を減らすか、2、3万人はどうするんだという議論をした経験から始まっている。今では人は足りないという話になってきたけれども、私は日本の民族のピークから減少への歴史の流れの中で考えるとここで人口が増えるなんてことは歴史の流れに合わない。過疎化はもっと進むという前接がいい。従って子供を生まな

いので人口が減り、年寄りが増えるということは当たり前のことなので高齢化も進み、今の高齢化率20%余りがやがて40%になる。過疎化も高齢化も進む阿蘇にすばらしい夢を描くことがないと恐らく結果は裏切られてしまう。過疎化も高齢化も止めてという前提を立てて、足りない所は行政なり政府から援助を受けるという発想はどこかで打ちきらないと阿蘇は死んじゃうというのが私が阿蘇を大宇宙的に見たときの感想である。そんな夢みたいなこと言ったら今日の現実はそのようなものじゃないという意見が出てくることは百も承知の上で基本の流れをつくりたいと思う。多少具体的にいうと、私たちが高度成長を急いで仕事をした時に起こった一つの特色は進学率が急上昇したことである。我々が農家へ行ったときも農家の年寄りはせがれはなんとか町で教育をつけてやりたいと、伝統的な農業はおれ一代で終わっていいんだという農家に何軒も会った。面白いのは過疎で困ると陳情に来た首長さんから息子の就職を頼まれたことだ。親の心としては日本の近代化に対して学校教育を有用祝してとうとう高等学校進学率が95%までになった。その上に40%以上が高度な教育を受ける時代を作った。これは国としてみてすばらしいことで、だからこそ世界に誇るハイテクの国家ができたといってもよい。しかしその裏側で農業がだめになっていった。それは農業は明治以来の伝統として義務教育を終わったら農作業というのが農村の伝統であったが、農業がいい悪いではなく、高校へ行ったら最後農業に戻ってこなくなったという歴史を作ったわけで、私からみれば後継者不足は進学率の影響だという見方をしている。そういう農業が21世紀には、立ち直らなければいけないことは確かで、輸入に頼ることはありえない。

日本列島全体をみて、九州の自慢は唯一食料を自給できる可能性が充分ある点に尽きる。日本全体が食料自給率が下がる一方なのは、巨大都市化が理由である。地方は季節に恵まれた食生活を回復する力を持っている。それを活かさなければいけない。ところが巨大都市へ一度行って大学まで行った青年たちがここへ来てちょっとそのことに気がつき始めている。東京で一流企業で定年までということ拒否する高学歴な青年たち、この青年たちが地方へ行って、何かをしたいという気持ちが動き始めていることは確かである。われわれの調査でも確かである。こういう高学歴な農業への参入者との関係をこの辺りで議論することが阿蘇の農業にもう一回新しさを作るんじゃないか、そして自慢でしようがない農家が都会の非常な異文化というか、知識を備えた若者を受け入れて未来の農業をつくるようなことをしていただいたら、それはものすごいなあと。その見合いをどうやるか、都会の若者のボランティアな活動とみなさん方の農業とどうしてもつなぐ必要がある。学生の時代からボランティアで農業というものと関係を持っていくことを通じて、見合いができていくのではないかと思う。日本の縄文時代から今日までの伝統的な素晴らしさにもう一度ここで、取り組んでいただくことについてこの懇話会に大きな期待をもっている。今新しい国土計画の策定に携わっているが、過疎化、高齢化という思想を逆転させたいと思っている。全国過疎化と高齢化で死にそうだ、助けてくれという大合唱をなんとか卒業したいと思っている。何かいい言葉はないかと考え、衰弱したようなイメージのある高齢化を光齡化に、過疎化は佳疎化に変えたい、それだけで気分が変わると思う。

日本列島に民族が住みついて行く知恵を、お互い出しあっていく時がきている。明治以来の日本を卒業しなければならないし、戦後55年体制下の戦後50年からも脱皮しなければならない時に来ている。阿蘇の草原からそのような声が出てきたらすばらしいと思う。小野寺さんは東京へ帰るのはやめてここでやってください。

若井：

予定の終了時間となったので今回はこれで終わりとしたい。次回は参加者の意見も聞くこととしたい。